

「恩納村の現状を知る」の講師を務めました。

10月7日、うんな中学校2年生の総合学習にて「恩納村の現状を知る」と題した授業が行われました。村役場総務課、企画課、商工観光課の職員とともに博物館学芸員も講師を務め、各々が恩納村の「財政」、「産業」、「施策」、「歴史」の現状について講演を行いました。「歴史」では村花・村木や仲泊遺跡、護佐丸、恩納ナビーなどについて四択問題を出題する形で紹介しました。授業時間の制約もあり、それぞれ短い持ち時間でしたが、生徒たちに直接講演をすることができ、非常に良い機会となりました。



寄贈品の紹介

この度、名嘉真在住の方より、博物館に和文タイプライターと予備活字箱などを寄贈していただきましたので紹介します。

和文タイプライターは現在ではほとんど聞くことがない機械ですが、日本語の文章を活字体で作成するために使用された機械です。現在はパソコンを使うことが一般的ですが、その前はワープロ（ワードプロセッサ）が使われていました。和文タイプライターはそのさらに前に使用されていたものです。1915年に「邦文タイプライター」としてその原型が製品化されて以降、使用可能文字数の増加やさまざまな改良が加えられながら、長い期間使用されてきました。使い方は上下左右にスライドするバケット部分にスタンプ状の活字が詰められており、その中から、打ちたい文字を機械的に取り出して、インクリボン越しに原稿に打ち付けることで文字が印字されます。機械本体には固定されたバケットに納められた活字の配列に対応した配列ボード（印刷してあるだけのシール）や現在の取り出せる唯一の活字を示すファインダー、活字を取り出す部分を操作するトリガーボタンなどが付いています。和文タイプライターの登場により文書作成は効率化されましたが、市販されていた小型の汎用機種でも2,000文字以上の活字がバケット部分に詰められており、一文字ずつ探しながら打っていくため、高速での印字は行えませんでした。しかし、清書用として役場での戸籍の印字のほか、学校などの公共機関、企業が内外の関係者に配布する書類や連絡文章の作成に威力を発揮していたそうです。

今回寄贈していただいた和文タイプライターは、1980年代に個人で文書作成や名簿作成などに使用していたもののことでした。また、恩納村役場村民課からも現在は使用しなくなった和文タイ



寄贈された和文タイプライター



予備活字箱

活字

プライターを資料としていただきましたが、こちらは電源が搭載されており、電子化された製品のようにです。合わせて、戸籍作成に使用する特殊な文字が入っている予備活字箱もいただきました。寄贈いただいた資料は今後の新収蔵品展などでお披露目したいと思っております。最後になりましたが、資料をいただいた皆様に感謝申し上げます。